

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第60号

平成30年1月9日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

78歳という、当時ではずば抜けた長寿

南北朝動乱時代、文武両道に通じた佐々木道誉

＝ 四條畷の戦い、楠正行に背後から甚大な被害を与える ＝

単なるバサラ大名ではなかった！

結論から申し上げよう。

”単なるバサラ大名ではなかった道誉。文武両道に通じ、室町幕府の重鎮として、尊氏・義詮二代将軍に仕え、貢献、78歳という当時ではずば抜けた長寿。四條畷の戦いで正行軍に唯一甚大な被害を与えた位置取りに、道誉の本領発揮！“と言ったところか。

佐々木道誉の事績を、吉川弘文館・人物叢書「佐々木導世」森茂暁から拾ってみよう。(写真：林家辰三郎著「佐々木道誉」表紙より転載)

後醍醐帝、隠岐配流を警固

笠置寺陥落後、天皇らは京都に送還されるが、佐々木道誉は蔵人頭の千草忠顕を預かり、四条隆量(高資の子)、一宮尊良親王も佐々木一門が預かっていることから、佐々木氏が元弘の変の鎮圧と事後処理に重要な役割を果たしたことが伺える。また、幕府軍が京の都から離れた後の京都警備にあたった武将の一人に佐々木佐渡大夫判官入道道誉の名が残る。

後醍醐帝の隠岐還幸の警護の武将は、千葉介貞胤、小山五郎左衛門尉、佐々木道誉がその任にあたった。

京に戻った佐々木道誉は、北畠具行(親房の従兄弟)を関東に護送するが、途中、幕府の命を受け、近江の国柏原で処刑をする。「太平記」「増鏡」は、”この間の儀は後世まで忘れがたくこそ候へ”と、道誉に対する具行の感謝の言葉を述べさせ、道誉の情誼に厚い性格を強調している。

元弘3年3月には尊氏と密約

佐々木京極家記録の讃岐丸亀京極家譜には、北条討伐を前提とした道誉と尊氏の連携が、早くも元弘3年(1333)の3月、鎌倉出発の時点で出来上がっていたことが記されている。また北条仲時らが自害して果てた地、

近江番場は道誉の所領であるとも。道誉が六波羅攻撃に参加した記録・形跡がないことから、京都と鎌倉の通路遮断の目的で、本貫地近江柏原辺りに待機した可能性が大きい。神器の接収も道誉のもとで行われた可能性が高く、倒幕戦の輝かしい功績と尊氏との緊密な関係があり、建武新政府で雑祖決断所の職員に登用されたものと見たい。

建武2年(1335)9月、尊氏は袖判下し文を初めて道誉に下し、中先代の乱での勲功に対する恩賞給付として、上総の国畔蒜荘(千葉県)と伊豆の国土肥・戸田(静岡県)を与えている。

この事は尊氏と道誉の間に主従関係が形成されていたことを示しており、道誉は、歴史の転換期に当たり、後醍醐帝との関係を絶ち、武家社会の興望を担う尊氏にかけて、新しい時代の歴史舞台に登場するための足掛かりを築こうとしていたのである。

妙法院焼き打ち事件は計算の内

暦応3年(1340)10月、道誉、秀綱父子による天台宗の門跡白川妙法院焼き打ち事件が起こる。道誉の一族若党が「例のばさらに風流を尽くして」紅葉狩りの帰途、妙法院の紅葉の枝を折る。妙法院の山法師等は折った枝



を奪い返し、佐々木一党を門外に追い出す。怒った道誉は、300余騎で押し寄せ、火をかけ乱暴の限りを尽くした。

山門の嗷訴を受け、幕府は遠流・配流と決め、道誉は上総の国に配流となるが、その配流には多くの若党が付き従い、道々で酒宴を催し、遊女をもてあそんだ。果たして道誉が配流先に着いたかどうかは定かでないが、翌年後半期には、確実に幕府に復帰している。

道誉は、幕府の暗黙の了解のもと、父祖以来の宿敵である山門の重要な一角を占める妙法院に被害を与えたとも思われ、のちの旺盛な活動ぶりを見ると、つまずきどころか飛躍台の役割を果たしたともみえる。

義詮の信任を得て、権力獲得

道誉は子息秀綱、秀宗、一族郎党を率い、四條畷の戦いに従軍した。この戦いの道誉の活躍の様子は太平記に描かれているが、道誉は、最終段階で大きな犠牲を払うことになる。四條畷で楠正行を倒し、吉野を陥落させて得意の幕府軍が、兵を収めて平田荘に帰ったところ、南軍はこれに奇襲をかけ、幕府軍は多くの被害者を出した。道誉と嫡子秀綱は数カ所に傷を負ったし、道誉の子息左衛門秀宗は大和水越で討死した。

道誉が戦で子息をなくした最初で、正平4年(1349)2月、幕府軍は京都に凱旋するが、道誉にとっては傷心の帰還だったに違いない。

道誉の幕府重鎮としての活動が本格化するののは、正平の一統(1351)の破たん後である。

道誉は、正平の一統で廃止された北朝を再興し、守護大名間の利害を調整するなど、將軍権力の強化と幕府政治の確立に貢献するなど、將軍足利義詮の絶大な信頼を得て、幕府内に大きな権力を獲得していく。

正平23年(1368)9月、道誉子息高秀が出雲守護職として登場していることから、20年以上にわたって維持してきた出雲守護を譲って引退したものとみられる。

道誉の引退する頃、歴史の表舞台にはなはだしく登場するのが幕府管領の細川頼之である。細川頼之の管領選任にあたって、道誉が深くかかわった可能性は高い。

正行が戦った道誉は、細川頼之に後事を託し、その細川頼之に誼を通じて北朝に投降した正行の弟、正儀。正統な吉野朝復権、一つの朝廷を目指した正行・正儀兄弟の翻弄された運命が垣間見える。

幕府の危機に登場する真骨頂

道誉はいったいどうして権勢を極めたのか。

幕府重職の歴任についてみると、山門造営奉行として比叡山延暦寺の末社化していた祇園社や興福寺等とのつながりを持ったことであり、政所執事として將軍家の台所を預かり、経済行為の結果生じる訴訟を所轄したこと、引付頭人・賦奉行として幕府の訴訟機関である引付方の

運営を采配するなど重要なポストを占めるとともに、幕府の最高議決機関たる評定のメンバー(評定衆)でもあった。

そして、道誉の真骨頂は、幕府が重大な危機に陥るとこつ然と登場し、問題の解決に乗り出し、幕府の運営を主導したことである。後光源天皇の擁立を成功させたこと、そして有力守護大名たちの抗争の仲裁にも入っている。

細川清氏の管領就任に関わった道誉であるが、3年後には排除に動いている。

道誉に陰謀を暴かれ没落した清氏は、正平16年(1361)12月、正儀とともに京都に打ち入った。この時、道誉の屋敷に踏み込んだ正儀が、あたかも貴賓を招くように酒肴の準備をして退散した道誉の心根に感銘して、火をかけるどころか道誉に増した酒肴を提供し、秘蔵の鎧と白太刀一振を置き土産にして退散した、との太平記の有名なくだりがある。

ここで太平記が褒めているのは、正儀の心の広さではなく、正儀を出し抜いてまんまと太刀をせしめた道誉の老獪ぶりである。

勝楽寺(甲良町)に眠る佐々木道誉



慶雲山勝楽寺は、滋賀県甲良町大字正楽寺にあり、JR河瀬駅から東南10キロメートルに位置する。寺前に清池をひかえ寺背に翠峰を負い、竹叢に囲まれた寺域は、南北朝の史話とあわせて、訪れる人々に懐旧の情をそそるに十分である。

この寺域は、佐々木道誉が、多賀河瀬両氏を前衛として居住していた旧館址であって、勝楽寺もまたその道誉を開祖として創建された。

佐々木道誉の菩提寺として、勝楽寺にはその念持仏と伝える重要文化財大日如来坐像、道誉の三男高秀の画・讃になる重要文化財の道誉画像等を伝え、その墳墓をはじめとする遺跡もまた寺内に存している。

時代の寵児として世に婆娑羅の粹を見せつけた道誉は、今、勝楽寺の静かな境内にひっそりと眠る。

(写真上：勝楽寺の山門 写真下：勝楽寺境内にある佐々木道誉の墓／文含め、甲良町ホームページより転載)

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)